



【先週のメッセージより】

～エジプト王の前に立つ～

- **モーセはパロと人々との間で板挟みになる** モーセがパロの元に行き、イスラエル人たちが主（ヤーウェ）を礼拝することができるようにと願ったことで、かえってパロの反発に遭い、イスラエル人たちの労働状況はますますひどくなった。イスラエル人達は

モーセに対して当然のように反発し、モーセを通して語られる神の言葉にも応答しようとしな。モーセにとって言うことを聞かない頑なな民との辛く、苦勞の多い40年の始まりである。

- **板挟みになったら祈る** 板挟み、八方ふさがりでもいつでも天は開いている。もはや、自分の力で何かをしようという野望もなく、謙遜にさせられたモーセは問題を一人で悩むのではなく、まさに話しかけるように神に向かい祈った。文句を言っても許されるのだ。

- **神の答え** 神は6章1～8節でモーセに幾つかの大切なポイントを語られた。四つだけあげておきたい。

「**今にわかる**」神は歴史も人間の心をも見通される。そこで、いつでも確実性をもって「今にわかる」とおっしゃることが出来る。

「**わたしはヤーウェーである**」わたしは生きている神、という意味が「ヤーウェー」に込められているが、見えない神がそこにおられるということを信じるのが何より求められていることである。

「**わたしはカナンを与える約束をした**」私たちに必要なのは、あのマリヤのように神が語られたことは必ず実現すると信じきって、神の解決を待つ信仰を養うことである。

「**わたしはあなたを救い、贖う**」神が救って下さるのでなければどうにもならない状況にイスラエル人達は置かれていた。神御自身が犠牲を払ってまで人を贖われるのである。そこに神の愛がある。

- **十の災いが始まる** 指導者の頑固さ、プライドは一国を滅亡に追い込む。家臣達は災いが続く中で、主を恐れ、モーセを尊敬するようにするがパロは頑なさを捨てようとしなかった。■

**GIVE
BLOOD**



GIVE LIFE



【今週の暗唱聖句】

「御子イエスの血はすべての罪から私
たちをきよめます。」Ⅰヨハネ 1:7

●血と聞いただけで気を失う人もいる中、聖書には数えきれないほど多く、血に関する言及がある。そればかりかキリスト教の中心教義は「キリストの血」に関することなのである。血は今も昔も変わらず、人間にとってもっとも重要な物である。

●ボーイスカウトで救急法を学んだ時、いちばん最初に教わったことは「止血の優先性／STOP the BLEEDING!」である。男性は体重60kgで4.8ℓ、女性は50kgで3.8ℓの血液が体内を流れているが、ある救急外来の看護師曰く、男性は1／3の血液を失うとパタッと死ぬのだそうだ。女性は半分失っても生き延びる人もいたりするらしい。日本赤十字社の献血のスローガンは「GIVE LIFE, GIVE BLOOD」であったのを思いですが、脳みそを一部失っても両目両耳を失っても、手足をもぎ取られようと、肺、腎臓、胃、腸などの内臓器を一部失っても人間は生きていける。しかし血がないと人間は確実に死ぬ。

●日本では日常的に「ハンコ」を使うが、朱色の由来は血の色である。昔は自分の血でもって血判を押したのが、今では押印で済むが、今でも何かに「実印」を押したらそれこそ「命懸け」を意味する。

●ところで、私たちには神により「正義」が心に刻まれているので不正に対しては償いを要求する。身近な者の命が奪われたなら奪った者の「血」・・・つまり死刑を求めないだろうか。私たちですらそうなら、なおのこと、不正を許されない神は私たちに対し、罪を犯したことへの報酬として「死」、つまり「血の値」を求められる。

●しかし神は私たちを赦そうとされる。レビ17:11で「肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」

と神は語られ、罪が赦される方法としていけにえの動物が身代わりになって「血を流す」ことで罪が赦されることを教えられた。しかし、この動物のいけにえは、後に来る実体、つまり、神の一人子の十字架の死を指し示すものであったのだ。キリストこそ過ぎ越しなのである。

●私たちはキリストの血によって贖われるのである。キリストの命であるキリストの血が、罪に死んでいた私たちに命を与えるのである。 ■

